



第7回パッションフルーツ祭が開催されました ～ 品評会の結果について ～

6月9日、パッションフルーツ祭が開催されました。あいにくの空模様でしたが大勢の方々が来場され、会場は熱気に包まれました。このイベントは、小笠原の代表的な果実であるパッションフルーツのさらなるブランド化を推進するため、出荷物の規格化や生産者の栽培技術の向上、島内外へのPR推進を念頭に催され、今年で第7回を迎えました。

今年のパッションフルーツは、春の日照不足により着色に遅れが生じ、生産者の方々は出品にあたり大変苦労されていました。そのような中、祭の前日には母島から生産者と出品用のパッションフルーツが父島へ到着し、農協において全出品物について果実審査を実施致しました。

審査は出荷箱部門と袋詰部門の2部門で行い、果実の形状・色合い・大きさの揃い・熟度・病虫害の有無・商品性・消費者ニーズ等を審査の要点として、5名の審査員で行いました。出荷箱部門(中箱:1.5kg以上)の出品数は7点でした。上位入賞の出品物は果実が大きく、揃いも良く、着色も良好でした。袋詰部門(5個入り)の出品数は6点で、出荷箱部門同様に果皮色や形の揃いを重視して審査致しました。6点全てのビニル袋に通気用の穴があり、水滴防止に配慮していました。荷姿の美しさは、販売の際に大切で

す。両部門ともに、消費者を意識した美しい出荷形態への取り組みが感じられました。



果実審査の様子

審査結果は、パッションフルーツ祭で公表、展示しました。来年はさらに多くの出品を期待し、小笠原のパッションフルーツ生産が益々振興することを期待しています。

入賞者は以下のとおりです。おめでとうございます。

【出荷箱部門】

- 金賞 小松農園(母島)
- 銀賞 友野農園(父島)
- 銅賞 都留隆興(母島)
- 特別賞 藤谷明憲(母島)

【袋詰部門】

- 金賞 都留隆興(母島)
- 銀賞 小松農園(母島)
- 銅賞 友野農園(父島)

< 農業センター所長：小嶋 >

施設公開と園芸教室を開催しました

科学技術週間の一環として、4月21日に「亜熱帯農業センター施設公開と園芸教室」を開催しました。農業センターの施設公開も3回を数え、島内で開かれるイベントのひとつとして定着しつつあります。今年も、島内外から300名あまりの方々にご来場いただきました。



実物鑑定クイズの様子

普段、農業センターでは小笠原の農業を振興するため、主に農業者向けの仕事をしていますが、施設公開では農業者だけでなく一般の島民や観光客の皆さんとのふれあいを通じて、日頃の私たちの業務についてご紹介する良い機会と考えております。

当日は、本館の内部に農業センターの研究成果を展示したほか、スタンプラリーでは、普段は一般公開していない試験圃場を巡り



農業機械に乗って笑顔の子供たち

ながら、研究用の果樹などにちなんだクイズに答えてもらいました。

スタンプラリーでは27名（166名中）が全問正解、実物鑑定クイズでは15名（178名中）が全問正解でした。全問正解者多数でしたので、正解者の中から抽選の上、景品をお渡ししました。

園芸教室では、①「野菜の作り方（ナス・キュウリ）」、②「病害虫の防除（農薬を使わない家庭菜園）」、③「肥料の選び方・使い方」の3つの講義を行い、聴講された方々との熱のこもった質疑応答が展開されました。

その他にも、父島の農業者の皆さん（友野さん、小田川さん、山野さん）による苗木の即売会や、職員による園芸相談、農業機械紹介展示、苗木の無料配布、実物鑑定クイズなどを行いました。



園芸教室の様子

今回、来場者の方々が楽しそうにクイズに取り組む様子や随所に見られた子供たちの笑顔に触れて、皆さんが農業センターを一層身近なものに感じていただけたものと自負しております。

<農業センター所長：小嶋>

この時期のマンゴ어의管理について

7月には果実肥大が進み収穫に向けての最終的な管理が必要です。昨年の台風の影響により着果量が少ない圃場も見られますが十分な管理を行い、島内外のお客様に喜んでもらえる品質の高いマンゴ어를作りましょう。

灌水

果実の肥大を促進させるためには灌水が一つのポイントになります。乾燥させると糖度が下がり、収穫前落下も多くなります。2～3回に分けて週あたり約66リットル/m²を目安に行ってください。なお、収穫期の多量の灌水は裂果の原因となることがあるので注意が必要です。

施肥

果実肥大促進、樹勢維持のため500g/樹(樹齢10年の場合)を目安に施肥を行ってください。来年のために収穫終期のお礼肥えも忘れずに。

病虫害防除

カイガラムシが多量に発生するとその排泄物により「すす病」が発生し、果実品質が極端に低下します。カイガラムシ類は風通しの悪い個所に発生しやすいので、込み合った枝葉の除去が効果的です。

また、炭疽病^{たんそ}や軸腐病^{じくくされ}の発生にも注意が必要です。予防剤の散布や込み合った枝葉の除去等により発生を抑えてください(登録農薬:アミスター10FL、スミレックス水和剤等:登録農薬の詳細は「病虫害防除指針 平成19年版」を参照して下さい)。

収穫～出荷

収穫時、外観状の品質に問題のない果実でも、その後、炭疽病や軸腐病の発生により商

品価値がなくなる場合があります。収穫後の処理によりこれらの被害を防ぐことができます。炭疽病については温湯処理(60で20分)、軸腐病については離層形成部のハンダゴテによる焼付け処理(処理時間2～3秒/個)により発生が防げます。また、店持ちをよくするために収穫後の予冷・低温貯蔵(10前後)を行ってください。



ハンダゴテによる焼付け処理の様子

他県で生産されているマンゴ어にも引けを取らない小笠原のマンゴ어。農業センターは生産量の増加、より品質の高いマンゴ어의生産等、ブランド化に向けての取り組みを生産者の皆さんと共に進めていきます。



収穫期を迎え、ネットをかけたマンゴ어

<河野>

トマトの着色異常発生 ～ コナジラミ類の徹底防除を！！～

小笠原では以前から施設を利用したトマト栽培で、コナジラミ類の発生が確認されてきました。しかし、実被害が少ないことから、防除はあまり行われていないのが現状です。ところが昨年度、コナジラミ類の影響による着色異常(図1)が発生し、トマトの品質低下がみられました。また、コナジラミ類の被害は着色異常以外にも、排泄物によるすす病の発生や、近年問題となっているウイルス病(黄化葉巻病)も媒介します。今年からは、コナジラミ類の徹底した防除を行う必要があります。



図1 トマトの着色異常果

コナジラミ類は25℃前後の温度を好み、20日程度で世代交代するので、小笠原での栽培環境化では増殖が早くなります。施設内のコナジラミ類が高密度になると、作物への被害が出やすくなり、防除も困難になります。そのため、トマト栽培終了後の残渣の処分、

施設を密閉しての殺虫(蒸し込み)、発生及び増殖源となる施設内や周辺の雑草除去を実施し、コナジラミ類を施設内に入れないことが防除の第一歩となります。そして、定植時の粒剤施用による初期防除、黄色粘着板(図2)を利用した発生予察による有

効薬剤(表)での適期防除を実施することで、コナジラミ類を施設内で増やさないことも重要です。これらの防除は小笠原でも比較的容易に実施することが可能です。



図2 黄色粘着板

図3 ラノーテープ

さらに省力的に防除を行う方法として、都内で効果が確認されているラノーテープ(図3)の利用が考えられます。これは、黄色のテープに薬剤が塗られており、テープに接触した雌成虫の卵は孵化が阻害されます。その結果、コナジラミ類の増殖が抑えられますが、効果が6ヶ月持続するため、その間の薬剤散布を減らすことが可能です。ラノーテープの導入には、経費がかかり、使用期間を守るなどのメーカー制約があります。しかし、コナジラミ類の発生が抑えられない場合は、導入の検討も必要だと考えています。

	使用時期	使用回数	備考
ベストガード粒	*	1回	
アルパリン粒・スタークル粒	*	1回	
サンマイルFL	1日前	2回	ミトマト不可
ベストガード溶	1日前	3回	
アルパリン顆溶・スタークル顆溶	*	2回	

表 コナジラミ類の主な登録農薬(*登録内容が複雑なので防除指針等でご確認ください)

< 営農研修所: 菊池 >